

防災は人間の生活とともにある。というより、人間が居住していないかぎり災害は成り立たない。仮に、地震で山が崩れたり、大雨で川が氾濫したとしても、そこに人間がいなければ、それらは単なる自然現象であり、災害とはなり得ない。それらによって人間生活に何らかの支障が出た場合に、はじめて災害として認識されることになる。ここで災害の被災をいかにして食い止めるか、つまり防災・治水の概念が登場する。と、長々と書いてしまったが、簡単に言えば、何らかの有用な土地利用がなされていなければ防災・治水はさほど必要とされないということにある。

また、先人の知恵というものは貴重なものである。防災・治水技術が現在に比べて未熟な藩政期には、災害の被害をできるだけ避けるということが、防災の一つであった。経験的に災害の生じる地域を避けて集落を設けていた。時には地滑りが生じることを前提にして、家を建て生活を営んでいたのである。たとえば、浅川に近い上松地区の地付山は地滑り地域であり、それを経験的に知っている住民は、南向きの緩傾斜で土地条件の良い場所であるにもかかわらず、そこに集落を設けることは避けていたのである。

浅川周辺地域でもそのようなことがみられる。通常、山間地から流れ出た河川はそこに堆積地形を造るが、浅川が東流する地域には下流の堆積地形とともに、中上流部の浸食地形がみられる特異な地形である。浸食部分では深い谷が形成され、堆積部分の河川は網流

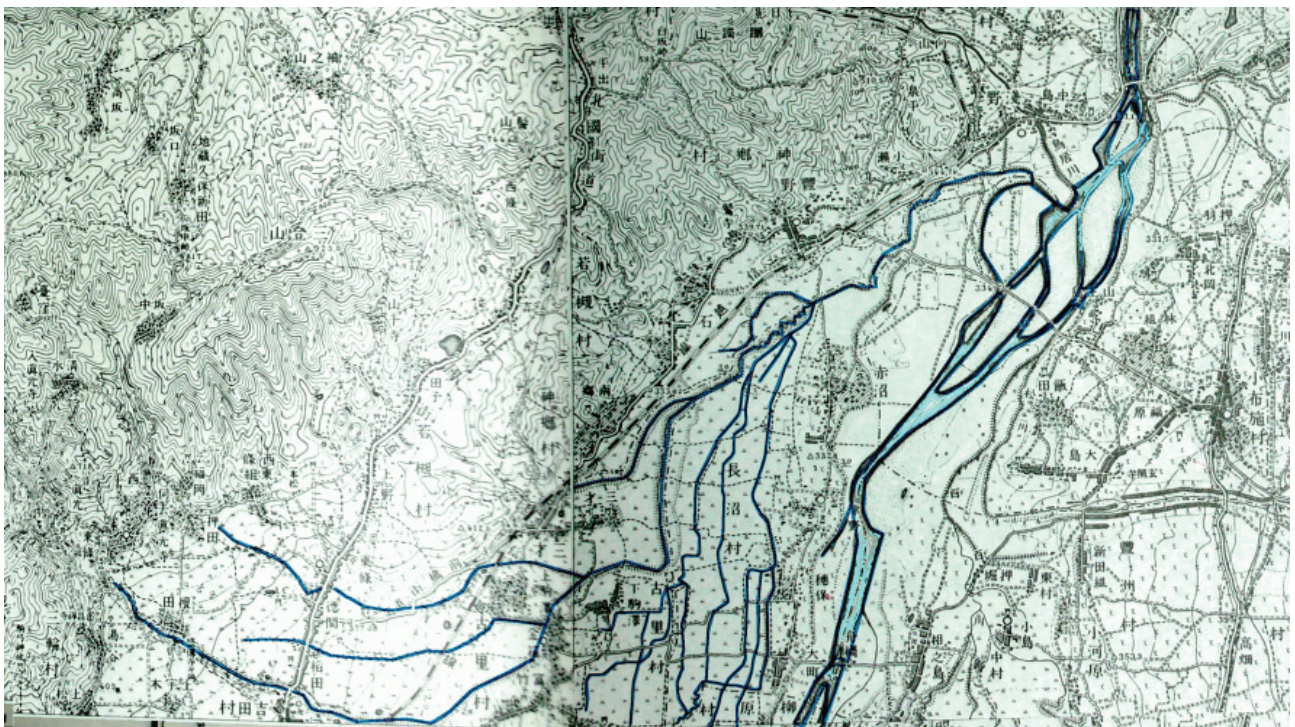


図 大正期の浅川流域

5万分の1地形図に加筆したものである。なお、処理の都合上、図のゆがみ補正や縮尺等への配慮は行っていない。

化し時には簡単に氾濫する。いずれにしても通行のための支障が出てしまう。そのなかで、もっとも通行しやすい部分かというと、浸食部分と堆積部分の遷急点になる。吉田から北上する旧北国街道が、この地点付近をぬって設けられていることは、先人の経験則に基づく知恵以外のなにものでもない。

さて、浅川の件である。浅川の治水が必要になったのは、堆積部分の氾濫原が開発されてしまったからであると言えよう。図は、長野周辺で近代測量に基づき最初に制作された大正初期の地形図である。図には、西側の丘陵と千曲川の自然堤防に挟まれた低地を、浅川をはじめとする河川が北流していること、駒沢集落の西側でこれらの河川が網流状に流れ、赤沼集落付近で合流していることが描かれている。当然のことながら、これらの低地は常に氾濫の危険にさらされることから集落の立地には向かず、水田として利用されていることがわかる。もし、この土地利用のままであったとしたら、治水の必要性はさほど生じなかったであろうことは容易に想像できる。問題は、この地域が都市的に土地利用されることを許してしまったことである。その結果、河川の氾濫を抑えるための防災・治水の必要性が高まってしまった。もし、災害の可能性の高い地域には恒常的物件の建築を禁止するなどの措置を執っていたならば、少なくともこのことは避けられたはずである。現在の都市計画・地域計画の欠点の一つはここにあるといえる。

確かに土木技術の進歩には目を見張るものがある。とはいえ、自然の猛威を完全に防ぐことができないことも事実である。造ってしまってから防災のために費やされる費用と、造ることを禁止することによって生じる費用、このような観点を、都市計画や地域計画の立案に盛り込んでいただきたいものである。